

抱かれるために体を準備する、なんて行為は何度しても慣れない。排泄器官を快楽のために洗浄するなどイカれている。しかしその快楽がたまらないのも事実であり……、と毎度一人でぐるぐる思考をこねくり回しながら脱衣所を後にする。

廊下に散った花瓶はとっくに綺麗に片付けられていて、台所で一杯水を飲んでから、浩輔の部屋へと向かった。

服は持って行くから、なんて言っていたくせに、用意されていたのはバスローブ一枚だった。下着もない。たしかにすぐ脱ぐのだろうけども。

部屋に入ると、浩輔がベッドに腰掛けてスマホをいじっていた。

「佐一さん」

「……おまたせ」

ぱあっと表情を明るくさせて、浩輔はスマホを置いた。ベッドには一流ブランドのロゴが入った大きめのショッパーが置いてある。

おそろおそろその中身を覗いて、すぐに後悔した。

黒やら白やらピンクやら紫やら。色とりどりのアダルトグッズが詰め込まれていた。まさか、これを全部使うわけではあるまいな、と浩輔を一瞥する。浩輔はにっこり微笑んで、胸焼けしそうなほど甘ったるい声で「佐一さん♡」と呼ぶだ

けだった。

思わずぞっとする。やっぱり浩輔の提案なんて撥ねのけておくべきだった。

「い、いつの間にこんなに」

「えっちなことになってる佐一さんをいっぱい見たいなあって思ってたなら、こんなことに」

「お小遣いは大事に使えて言われてるだろ」

「失礼だな、ちゃんと俺が働いたお金で買ってますう」

そういうのは生活費もなにからなにまで自分で稼いでから言うモノである。

睨んでみるが、浩輔と言えどこ吹く風。口笛でも吹き出しそうなほどひょうひょうとした態度で俺を押し倒すと、ちゅっ♡と可愛らしいバードキスを落としてきた。

「んむっ」

「全部ちゃんと洗ってるから安心してね」

「そういう問題じゃねエ……」

雰囲気を作るなんて間もなく、浩輔の手がバスローブの中に滑り込んできた。

相変わらず手が早い。しかし、俺はそれが存外嫌じゃない。

ふにふにと柔らかく小さかった手は、とっくに大きく骨張った形に育っている。なにが楽しいのか、俺の胸板に手を添えると、角張った指の関節できゅむりと乳首を挟まれた。そこで得る快楽を散々覚え込まされた俺の体は、半ば条件反射的に「んっ♡」と小さな声を漏らしてしまう。

「っ、ん、……っ、ふ、……んう……♡」

「佐一さん……♡」

うっとりと名前を呼ばれる。風呂上がりの熱が冷め切らないまま、また少しずつ体が熱を帯びていった。

指がこねこねと乳首を捏ねては引っ張る。じん、と熱い快楽に体が揺れてあっという間に下半身が熱を帯び始めた。膨らみ始めた俺自身と浩輔のソレが擦れ合う。裏筋のあたりがただ焦れたく擦れ合うだけだから、強い快感が欲しくてつい腰を振ってしまった。

浩輔もまた、快楽に耐えるように眉根を寄せる。熱っぽい息を吐くと、その口で唇を塞がれた。

「っふ、んううッ、お、ん……♡ ン……う♡」

ぬるりと滑り込んできた舌尖にすりすりとお上顎を撫でられる。ぞわ……っ♡と背中をなにかが走った。くちゅくちゅと

卑猥な水音に頭の中が蕩かされていく。

浩輔がゆっくりと離れていく。濡れた口周りを舌で一周すると、体を起こしてショッパーの中に手を入れた。そうだった。今日はそれがメインだった。

「アネロスって知ってる？」

「知らねエ……」

「一応医療用のグッズではあるんだけど、佐一さんのだあいすきなとこ、いっぱいぐりぐりしてくれるの」

浩輔の指が腹の下側を撫でる。触れられている場所には心当たりがあった。内側から何度も浩輔にド突き回されて泣かされたことがある。あの強い快楽を思い出して息を飲む俺を、安心させるように頬に優しいキスが落ちてきた。

「大丈夫、きもちいいだけだよ」

「まだなんも言ってねえだろ」

「そう？ 不安そうな可愛い顔してた」

「んなことねエ」

歪なT字の黒いアネロスとやらに、ローションがかけられていく。太く膨らんでいる先端が前立腺を刺激するように出来ているのだろう。

浩輔は中指で俺の後ろの具合を確認してから、ゆっくりとアネロスを挿入してくる。先に慣らしていたおかげもあって、そう大きくないアネロスは簡単に俺のナカに収まった。

「んんっ……、ふ……、んっ♡」

「痛くない？」

「大丈夫、けど、変な感じだ……」

これまで浩輔の指とチンポしか受け入れたことのない後孔が、無機質な異物に違和感を覚えている。少し腹に力を入れるとナカで先端がぐりぐりと蠢いて、前立腺のあたりをぐうっと抉ってきた。

「ひっ♡ あ、あッ♡」

思わず腰を突き上げてしまう。

その衝動でまた後孔に力が入った。ぞくぞくぞくっ♡と駆け上ってくる快楽に背中が仰け反って腰を突き上げる。

これは、まずいかもしれない。冷たい汗も零れてくる。

浩輔といえば、満足気に俺を見下ろしながら、片手をまたショッパーに突っ込んでいた。

「っあ♡ あ♡ まってっ、これ、勝手に……んうッ♡」

ぐりゅ♡ぐりゅ♡ぐりゅ♡

後孔のうねりに連動してアネロスも動くから、一度快楽に身悶えてしまうと終わりが無いらしい。根元までずっぽりと埋まっているから簡単に抜け落ちてくれるわけもなく、咄嗟に伸ばした手はあっけなく浩輔に捕まってしまった。

「どうしたの、そんなに腰くねくねさせて。気に入った？」

「ちがっ、おあッ♡ ……っ、んっ♡ あ、あ、あ♡ とまんな……っ♡」

「前立腺とチンポって連動してるんだって」

「なんの、はな、っあ、あ、んあっ♡」

振りほどきたいのに振りほどききれない。どうにか浩輔から逃げようとシーツを蹴った足も捕らえられ、肩に担ぐように固定されてしまう。足が開く動きに合わせてまたアネロスが腸内をぐるりと回った。足の裏から頭のとっぺんにかけて、燃えるような熱さが駆け巡る。

前立腺を刺激されるごとにチンポへの熱も溜まっていく。ビンビンに勃起して、俺が体をよじるたびに揺れた。先端からはだらりとカウパーがこぼれ落ちる。

浩輔がショッパーから取り出したのは電動マッサージ器だった。疎い俺にだって、その形には覚えがある。カチリと嫌な音がして、激しく震え始めた半球体のそれを裏筋にそっと

あてがわれた。

「~~~~~ッ おお!!♡♡」

びゅくっ♡びゅくびゅくびゅくッ♡

張り詰めていたものが瞬く間に決壊して、絶頂を予感する間もないまま射精を強制される。浩輔は白濁が飛び散るのも気にしないで、震える電マで竿を上下に往復させはじめた。

「~~~はッ、あ、ああッ♡ イッた♡ こおすけっ、~~
ッンン！ ふ♡ あ、あ♡ あ♡ ああ~ッ♡」

玉袋から鈴口までを丹念に振るわされる。直接的な快楽が後孔へ力を入れさせるから、ナカに埋まったままのアネロスもぐうっ♡ぐうっ♡と蠢いて止まらない。

外側と内側、両方から弱いところを刺激されて、絶頂の波は引く間もなくまた襲ってきた。ぞわぞわと寒気にも似たものが背中を這いずって、しかし逃げられない。浩輔の手が俺の片手を掴んで離さない。空いているはずのもう片手もシーツを掴んだぎり離せなくなってしまった。

ぐーうっ♡ぐーうっ♡

「おおッおおおッ♡ ほっ♡ イくっ、イクッ♡♡ ~~

～～ッ♡♡ は、あ、あ♡ あ♡ いまイッてる♡ うしろ、
いぐいぐいぐいぐいぐいぐッ♡」

「じゃあ前もイかせてあげるね」

「おッ♡ らめっ、さきっぽ、電マだめっ♡ いまでるっ、
でっ、あ♡ あ♡ ううううううううううッ♡♡」
びゅるるるるるッ♡♡♡

たった今出したばかりだったのに、また射精させられた。
強すぎる絶頂感に頭の中がまっしろになっていく。

ガクンッと腰が跳ねて、ようやく電マがずれた。しかし今
度は片手で竿を掴まれて、鈴口に電マを押し当てられる。

「～～～～～～ほォ!?♡♡♡♡

ヴヴヴヴウヴヴヴ……

クチュクチュクチュクチュクチュッ♡

先端から容赦なく振動を受け入れさせられている。カウパ
ーが飛び散って、かと思うとまたイかされている。チンポを
捕まえられているせいでロクに身動きが取れなかった。汗だ
くの背中にシートが張り付いて、ずりずり体を揺らすしかで
きない。

「まッ……♡ ほッ、おおおッ♡ おッ♡ ～～～～ッ♡♡

イッ、イッでるっこおすけっ♡ や、お、あ♡ あ♡ あ♡
イぐイぐイぐイぐイぐイぐイぐッ!!♡♡」

「カウパー多すぎて射精してるのかわかんないね。そんなに
きもちい？ それともおしりのほうがきもちいい？」

「わかんらッ、いッ！♡ んおおお〜〜〜〜ッ♡♡ ほッ♡
オッ♡♡」

かくんッ♡かくんッ♡

絶え間ない絶頂の波に体の痙攣が止まらない。後ろから切
れ目のない絶頂感を味わわされ続け、前からは強制的な射精
を余儀なくされる。シーツを蹴って身悶えて、頭を振っても
浩輔はやめてくれない。——きもちいから、嫌とも言えない。

追い詰められていく体に、頭の中で警鐘が鳴り響いている
はずなのに。

「あ〜〜〜〜ッ♡ ほ♡ おおゾッ♡ ほ、オオ♡ 〜〜
〜〜〜ッ♡♡」

「ずっと腰かくかくしてるね」

「ふっ、ゲウ〜〜〜〜っ♡♡ あ♡ いぐう♡ いぐッ♡
おおッ……♡♡」

「俺の声聞こえてる？」

ようやくチンポから電マが離されるが、びゅくびゅくと精

液を飛び散らせるのがとまらない。

痙攣する体に合わせてなおも動き続けるアネロスを、ぐぼんっ♡と引き抜かれる。

「おオッ♡♡」

空洞になったはずの腸壁が、埋めるものを求めてヒクヒクしている。絶頂感が抜けきれない体をベッドに預け、必死に肩で息をしていた。目の前に靄がかかったようでくらくらする。酸欠なのかもしれない。

浩輔が優しく頭を撫でてくれるのが気持ち良かった。

「っこうすけ……♡」

「佐一さん、おもちゃの才能あるんじゃない？」

「意味わかんねーこと言うなっ……」

浩輔の手をいたずらに甘噛みすれば、こら、と優しく叱られた。

ようやく呼吸も整ってきて、体を起き上がらせられるようになる。浩輔にキスのひとつでもくれてやろうと思ったのだが、俺の回復を見た浩輔はまたすぐにショッパーのほうを向いてしまった。

またオモチャか。